東アジアと福岡

East Asia　Fukuoka

令和5年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

変革（へんかく）と調和（ちょうわ）の交流史2000年

第1回　5月20日（土）

青銅器を巡る社会変動

埼玉大学人文社会科学研究科

中村　大介 氏

入場無料

会場 福岡市博物館 1階講座室

（福岡早良区百道浜3丁目1－1）

時間 13時30分～15時00分

※各回の定員や申込方法は、市ホームページでお知らせします。

主催・問い合わせ先

福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881　福岡市博多区井相田 2-1-94

TEL：092-571-2921　FAX：092-571-2825

電子メール：maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

埋蔵文化財センターホームページ

※会場は福岡市博物館になりますので、ご注意ください。

青銅器を巡る社会変動

中村大介

1. 日本列島の初期青銅器

日本列島では、弥生時代前期後半ごろから朝鮮半島の粘土帯土器文化の人々と交渉しはじめ、青銅器に関わる情報を得えていた（吉田2010; 山崎2015）。そして、中期初頭になると、武器を中心とする青銅器が本格的に導入され、この時期、成長してきた有力者の墓に副葬されはじめた。城ノ越式土器が成立し、金海式甕棺が広がることで、玄界灘から有明海での一体感が生まれた時期にあたる（下條2006）。

よく知られているように、中期初頭に副葬される青銅器は、細形銅剣、細形銅矛、細形銅戈といった武器であり、これに多鈕細文鏡が加わる場合がある。この時期、玄界灘沿いの唐津平野、早良平野（図1a）、糟谷地域、遠賀川流域、さらに響灘両岸（図1b）で青銅器を副葬した墓が出現した。特に早良平野では青銅器の集中が顕著であり、吉武高木遺跡においては、数世代の青銅器をもつ人物が一定の墓群に葬られていた。首長が出現したと考えても差し支えない様相である。また、有明海北部では佐賀平野の東山田一本杉遺跡の甕棺墓から青銅製の切先が出土しており（図1c）、人骨に刺さった状態ではないものの、すでに青銅器製武器を用いた闘争が始まっていた可能性が高い。

一方、中期初頭の吉武高木遺跡から中期後半の伊都国や奴国の王墓へと、副葬品を多く副葬した厚葬墓がそのまま連続していくわけではない。細形銅剣は確かに広い範囲で受容され、佐賀平野の吉野ケ里遺跡北墳丘墓のように、細形銅剣をもつ甕棺墓が複数集中することはある（図2）。しかし、一つの墓に入る青銅器は減少するため、中期初頭で一度ピークを迎えたのちは、王墓出現までいわゆる揺籃期のような状況になっていた。

その揺籃期の中期前半に、佐賀平野を中心として、朝鮮半島に由来する粘土帯土器と多数の鋳型が出土する。副葬品では顕著にはわからないものの、社会の複雑化は着実に進行していたのである。弥生時代中期初頭に併行する時期は、朝鮮半島中西部から西南部で多量の青銅器を保有する首長墓が点在していたが、朝鮮半島北部で衛氏朝鮮が成立したことで、中期前半には急速にそれらの首長墓が衰退する。時期や鋳型でみられる技術の一致から、工人を含む粘土帯土器文化の人々が渡来してきたことで、より青銅器を生産できる土壌が形成されたといえよう。

では日本列島の青銅器の起源はどのようなものであっただろうか。実は、日本列島に伝わった朝鮮半島の青銅器は、中国の本流といえる中原地域の文化に由来するものではない。日本列島にやってくるまでの間も様々な社会変動を経て、生み出されたものである。次章では、まずその系譜をみてみよう。

2. 細形銅剣の由来と武装の刷新

夏家店上層文化と遼寧式銅剣　朝鮮半島北部で成立したと考えられる細形銅剣は、それより数百年以上前に成立した遼寧式銅剣(琵琶形銅剣，曲刃短剣)に由来することが知られている。現在の内蒙古東南部から遼寧省西部は遼西地域とよばれ、そのなかでも、シラムレン-ラオハ川流域では、前1100年頃から多種の北方青銅器を有する夏家店上層文化が栄えており、遼寧式銅剣はそこで出現した（図3）。

夏家店上層文化の武器は、銎柄式短剣（図4: 1）、有茎式短剣(遼寧式銅剣，図4: 2)、有柄式短剣（図4: 3-8）といった三種の短剣に、銅矛（図4: 9-10）、銅戈（図4: 11-13）を加えたものである。銅戈は中原地域に由来するものであるが、夏家店上層文化に受容され、独自に鋳造もされていた。

主要な武器である短剣は、中原地域の文化には元々無く、草原地帯で愛用されてきたものである。前15世紀頃から、獣首や鈴首などの把頭飾をもつ特徴的な短剣と刀子からなる前期北方青銅器が、アルタイ-サヤン地域、モンゴル高原の漠北と長城地帯広がり、長城地帯の東端に近いシラムレン-ラオハ川流域にももたらされた。その地域に居住しはじめた夏家店上層文化の人々は、前期北方青銅器の影響を受けつつ、上述した独自性の強い武器を創出した。そのなかの一つである遼寧式銅剣は、出現からほぼ時間を置かず、朝鮮半島南部まで広がる。その後、前7世紀以降、夏家店上層文化は解体するが、遼寧式銅剣は東北アジア一帯で保持され、剣身が狭い新式遼寧式銅剣に変化するも、各地の首長層の象徴的武器として重要視された。

燕国と騎馬遊牧民の広がり　それでは北方青銅器は中原地域の文化と無関係かというとそう単純でもない。まず、遼西地域までは武器構成には戈が組み込まれていることが多く、その由来は中原文化にあり、直接的には燕国からの影響を受けたものである。新式遼寧式銅剣の時期には、遼西地域で遼西式銅戈という独自性の強い戈も創出され、逆に燕の戈に影響を与えた。この時期は強勢を誇った夏家店上層文化が消滅し、遼西地域の在地首長層に燕が接近した段階である。また、同じ時期に、大興安嶺の隙間から後期北方青銅器（後期オルドス青銅器）をもつ騎馬遊牧民が流入し、新しい馬具を伝えている（図5: 7）。東北アジアは様々な文化が混じり合う地であったといえよう。

粘土帯土器文化の誕生　遼東地域に接する遼河中流域の瀋陽鄭家窪子遺跡では、新式遼寧式銅剣や、銜、鑣(銜留)、喇叭形銅器からなる馬具をもつ首長墓が出現する（図5a）。夏家店上層文化の系譜を引きつつ、騎馬遊牧民の馬具が取り入れられていた。特徴的なのは、土器であり、口縁部に粘土帯をもつ粘土帯土器(粘土帯甕)と、黒色磨研の長頸壺がセットになっていた（図5a, 5b）。

この土器のセットと青銅器の一部が朝鮮半島に南下し、その地域の粘土帯土器文化が形成された（図6）。朝鮮半島の粘土帯土器文化の初期の武器は新式遼寧式銅剣であったが、礼山東西里遺跡の段階に北朝鮮のどこかで細形銅剣が成立し（宮本2020）、朝鮮半島全域に普及した。さらに、扶餘九鳳里遺跡の段階で細形銅矛、細形銅戈が加わり、定型的な多鈕細文鏡も出現した。最上級の首長墓から出土する複雑な製作技術を要する異形青銅器はもたらされなかったが、青銅製武器セットや多鈕細文鏡は日本列島で受容され、首長を象徴する副葬品となったのである。

朝鮮半島の粘土帯土器文化は前述したように、初期には西側を中心に栄えていたが、前2世紀になると、東南部が勢力を持ち始める。原三国時代になると、東南部の嶺南地方を中心に、多量の青銅器や鉄器を副葬する首長墓が多く出現した。著名な昌原茶戸里遺跡もその一つであり、嶺南地方の南部では、青銅器よりも鉄器、特に鉄製武器が首長のシンボルとなり、日本列島よりも早く青銅器の役割が変わった。

細形銅剣の武器組成　日本列島への青銅器の系譜を整理すると、それは東北アジアに求められ、中原青銅器と対峙していた北方青銅器に組するものであった。そして、夏家店上層文化の段階には短剣だけでなく、矛や戈も武器に組み込まれていたが、新式遼寧式銅剣の段階には、短剣のみが保有される場合が多く、朝鮮半島でも初期は短剣のみが副葬された。前述したように、扶餘九鳳里遺跡の段階から矛と戈が加わり、武器組成が豊かになるが（図7）、これには、当時遼東地域まで勢力を伸ばし始めた燕の影響があったと推定される（中村2022a）。燕では鉄製、青銅製の剣、矛、戟、戈などが軍隊での武装となっており、それを見る機会が増加した結果、粘土帯土器文化の首長層がそれに対抗して武装の見直しを図ったのだろう。日本列島にはその段階の青銅製武器が入っているので、結果的に東北アジア伝統に燕の影響が加わった武装が導入されたといえる。

3. 青銅器の価値と流通

戦国時代から漢代の社会　次に日本列島に青銅器が流通し始めた時代の中国の社会についてみてみよう。『史記』貨殖列伝に、春秋期以降の蓄財に成功した素封家（商人）が多数紹介されているように、戦国諸国や漢では商人が活躍できる経済構造となっており、倭や朝鮮半島南部の弁・辰韓と全く異なる社会であった。西欧における商業的中間階級は近代の産物であり、古代の交易者は統治権力に関わる上層階級と直接交易活動に従事する下層階級であったとされる（ポランニー1980）。西洋との比較には細心の注意を払うべきではあるが、中国では農耕、牧畜、製鉄などの生産業で名を成す商人が多く、なかには洛陽の師史のように長期間の行商に出る者をよく使って蓄財する者もおり（『史記』貨殖列伝）、中間階級が下層の交易者を使役しているような社会であった。

『史記』張騫列伝には、蜀の商人が蜀布などを携えて雲南の滇国の西南千里にあるミャンマーと推定される滇越国にまで赴いており（長沢2017）、経済圏の境界を超える商人も活躍していた。もちろん、このような商人は朝鮮半島南部や日本列島にはいないため、黄海東部の青銅や鉄を含む交易は、自由な商業活動の産物ではない。しかし、燕や漢の領域に利潤を求めて動き回れる人々がいたことは、交易の活発化に影響しただろう。加えて、彼らは、燕や楽浪郡の貴族層と、朝鮮半島南部や日本列島の首長層との仲介者となりえたと考えられる。

また、衛氏朝鮮もその成立過程で燕、斉、趙の亡命者を受け入れているため、漢と同様の経済構造を確立していた可能性は高い。楽浪土城で出土した半両銭の鋳型は（図8a）、前身の衛氏朝鮮が鋳銭を行っていたことを示すのだろう。こうした社会が朝鮮半島南部への交易ネットワークに介入した場合、大きな変化をもたらす結果になったであろうことは想像に難くない。

青銅の価値　青銅の価値については、近年、難波洋三（2016）が満城漢墓出土銅鋗の銘文、

『史記』貨殖列伝、永平七年銘内行花文鏡（図8b）の銘文を手掛かりに青銅1kg が300 銭であるという試算をした。漢での青銅の価値は、東アジアの基準となりうることから、極めて重要な論考である。そして、難波は若江賢三（1985）と佐藤武敏（1977）の論を引きつつ、漢の穀物と布帛を青銅の価値と対比しており、青銅1kg は、粟150ℓ、麻布4 匹、絹布2 匹であったことにも言及している。布帛にはサイズ規定があり、これも銅銭と同様に交換手段として機能していた（佐原1985）。また、成人奴隷は青銅1kg の約40～70 倍の価値になる。『三国志』魏書三十韓伝には王莽の時期に廉斯鑡が辰韓の右渠帥になったとき、辰韓の漢人奴隷1500 人を開放する際、死亡した500 人の対価として、辰韓15000 人と弁韓布15000 匹を支払ったという内容がある。楽浪郡が辰韓から攻撃を受けていたことを示す内容であると同時に、人と布での支払いがあったことがわかる事例である。ただし、この取引は弁償を兼ねているので割高である。

満城漢墓銅鋗が1680g で五銖銭に換算して400 銭、永平七年銘内行花文鏡は約350g で300 銭なので、後者が割高であるが、難波（2016）は、後者の製作には労力がかかり、銅より高価な錫の割合が高いからと推定している。前者と後者には200 年近い時期差があるので、価値の変動もあっただろうが、製品の出来によって付加価値が付いたのだろう。倭が米を交換材にした場合、永平七年銘内行花文鏡1 面で300 銭であり、籾付きの米だと約170kg、絹布2 匹で購入可能であった。

楽浪郡の市まで行けば、上記のような価値で交換は可能であるものの、定期的に楽浪郡まで倭人が行っていたのかは定かでない。むしろ、漢の文物を無作為に獲得し、副葬している様子が朝鮮半島南部にも、日本列島にもみられないことから、市での自由売買には参加していないだろう。これらの地域に与えられる文物は、商人が仲介に入っていたであろうが、行政や貴族層によってコントロールされていたと考えるべきである。青銅原料も鉄も管理の対象であり、それなりの対価が必要であっただろう。また、外交や貴族層からの威信財の獲得には、米などの一般消費物はふさわしくなく、やはり韓や倭の諸国の特産品が求められたはずである。

青銅の流通　青銅器生産に関しては、朝鮮半島でいくつかの銅鉱床があるため、原料の獲得には一定の優位性がある。そして、鉛同位体比分析から判断して、遼寧式銅剣が導入された朝鮮半島の青銅器時代には、南部ですでに青銅原料の一部が生産されていた。

鄭ヨンジュンらによる朝鮮半島南部の広範囲に渡る方鉛鉱の分析データによると（Jeong et al. 2012）、Zone I: 慶尚盆地、Zone II: 太白山盆地東部、Zone III: 太白山盆地西部, 沃川変成帯, 嶺南山塊、Zone IV: 京畿山塊西部という四領域に分かれ（図9, 図10）、青銅器時代に開発されたのはZone IIである（図11）。粘土帯土器文化段階には、Zone IIIも利用されはじめた（図11）。Zone IとIVは少なくとも原三国時代を含めても開発されず、朝鮮半島南部では専らZone IIとIIIの青銅原料が使われ続けた。また、華北産とされるものの、遼東産の可能性が高い青銅原料は、青銅器時代から原三国時代まで継続的に利用されていた。細形銅剣は朝鮮半島内でしか生産されないことから、原料が輸入されたことは確実である。ただし、朝鮮半島では青銅器を構成する素材のうち、錫が無く、現時点でわかっている最も近い産地は、遼西地域のシラムレン川流域である。そのため、中国東北地方一帯に広がっていた粘土帯土器文化のネットワークが、燕の拡大後も保持され、朝鮮半島まで繋がっていたのだろう。

日本列島では、弥生時代中期初頭には朝鮮半島から青銅器を搬入しつつ、やや実用に耐え

るか怪しいものの、独自型式の細形銅戈の生産が始まる。前述したように、中期前半には佐賀平野を中心に本格的に青銅器生産が開始される。その間、青銅原料の産地には差異はみられず、遼東産、Zone II、Zone IIIの原料が利用される（図12）。宗像地域の田熊石畑2号墓の細形銅矛の原料は、遼東産であるが、型式は在地生産されたものである。そのため、中期初頭の伝世品が副葬されたのではなく、多様な原料が継続的に流通していたといえる。また、出雲地域では在地生産の細形銅剣がみられるようになるが、中期前半から遼東産を主体として生産している。この時期には朝鮮半島西側の首長墓は衰退しているため、流通経路のみが残存し、新たに仲介者となった衛氏朝鮮がその利潤を得たのだろう。

4. 交易する社会へ

鉛同位体比分析の成果が示すように、日本列島では青銅器は製品、原料ともに常に輸入に頼っていた。朝鮮半島においても、銅と鉛は産出していたが、錫が無いため、青銅器を完成させるには、輸入に頼らざる得ない。それでも青銅器を生産し、首長墓の主要な副葬品であったのは、前9世紀頃の遼寧式銅剣の拡散のインパクトが強く、東北アジア一帯で鉄製武器が主体となるまで、社会や有力者のシンボルとして固定化されためである。むしろ、首長や有力者にとっては、そのシンボルを生産し続けるために、交易ネットワークが不可欠なものとなっていた。

粘土帯土器文化の首長層が細形銅剣、細形銅戈、細形銅矛、多鈕細文鏡といったバラエティを完成させた時期に、日本列島の首長層はこれらを受容し、黄海東部交易の一端を担うこととなった。わざわざ、金海会峴里遺跡に仲介者を派遣しており、確実に青銅器及びその原料を獲得する体制を築いている。さらに、出土土器の主体が弥生土器で占められる金海亀山洞遺跡では、鋳造鉄器を再加工した鑿がみられるが、こうした鉄器は朝鮮半島では稀であることから、この種の鉄器が多くみられる日本列島に、青銅原料も合わせて送っていたのだろう。武器や威信財だけでなく、日常道具まで輸入を必要とする社会が到来したのである。

弥生時代中期は、朝鮮半島から青銅原料がもたらされる一方で、北陸地方から菩提産碧玉や糸魚川産翡翠がもたらされていた。沿海部の海人の活動に支えられていたと推定されるが、青銅原料を多く獲得している出雲地域が大きな中継地点になっていたと考えられる。ただし、こうした玉類は朝鮮半島には3世紀末までもたらされないので、あくまで日本列島内での交換財であった。米や稲藁といった食糧も、威信財や首長の管理下にある金属器の交換には不向きである。おそらくは、残存しにくい布や南海産貝類が主要な交換品であったのだろう。

楽浪郡が成立する時期になると、日本列島の首長層の交易に関わり方にも変化が生じる。金海亀山洞遺跡のような交易拠点は無くなり、泗川勒島のような国際港、蔚山達川里のような鉄鉱石産出地に、出入りするようになる。伊都国や奴国の首長が入手した大量の前漢鏡は単なる交易では入手できないが、それ以前の遼東地域への交易ネットワークが確立されていたからこそ、外交のルートとしても活用できたと考えるのが自然だろう。

以上のように、日本列島が東アジア世界と関わり続けるようになったのは、これまで述べてきた青銅器及び青銅原料の獲得が切っ掛けである。交易によって社会内部の要求を満

たす構造が形成され、それが少なくとも古墳時代まで維持されたのである。ある意味では農耕社会開始以上に、日本列島を変えたのが青銅器であったといえるだろう。

引用・参考文献

石川岳彦2017『春秋戦国時代 燕国の考古学』雄山閣

小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学』六興出版

魏菊英1995『華北地台北縁元古宇中鉛鉛鉱床的地球化学』地質出版社

北九州市教育委員会2012『小倉城二ノ丸家老屋敷跡2』

京畿道博物館2010『遼寧古代文物展』

京都国立博物館編1993『倭国: 邪馬台国と大和王権』毎日新聞社

小林青樹・他2012「近年の遼寧地域における青銅器・鉄器研究の現状」『中国考古学』12

佐賀県教育委員会1995『東山田一本杉遺跡』

佐賀県教育委員会2003『柚比本村遺跡』

佐賀県教育委員会2012『吉野ケ里遺跡: 弥生の墳丘墓』

佐藤武敏1977『中国古代絹織物史研究』上, 風間書房

佐原康夫1985「漢代の市について」『史林』68(5)

下條信行2006「玄界灘 VS 有明海」『青銅の都市』弥生文化博物館

靳楓毅1982『論中国東北地区含曲刃青銅短剣的文化遺存(上)』『考古学報』1982(4):

常松幹雄2006『最古の王墓: 吉武高木遺跡』新泉社

朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会1989『朝鮮遺跡遺物図鑑』2

長沢和俊2017『張騫とシルク・ロード〔新訂版〕』清水書院

中村大介2010「粘土帯土器文化と弥生文化」『季刊考古学』113:

中村大介2012『弥生文化形成と東アジア社会』塙書房

中村大介2015「朝鮮半島における石器から鉄器への転換」『埼玉大学紀要(教養学部)』51(1)

中村大介2021「細形銅剣出現後の日韓青銅器流通と鉛同位体比」『埼玉大学紀要(教養学部)』57(1)

中村大介2022a「青銅短剣を持つ人々: 弥生文化の武器の源流」『古代における外来系武器・武具の導入と生産技術展開の様相』古代武器研究会

中村大介2022b「漢の拡大と環黄海東部の多層交易」『モノ・コト・コトバの人類史』雄山閣

中村大介2022c「楽浪郡設置以前の黄海東部交易と弥生文化」『南関東の弥生文化』吉川弘文館

難波洋三2016「銅鐸の価値」『季刊考古学』135

ポランニー, K.（玉野井芳郎・栗本慎一郎訳）1980『人間の経済I』岩波書店

馬淵久夫・平尾良光1987「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73(2)

宮本一夫2020『東アジアの青銅器時代の研究』雄山閣

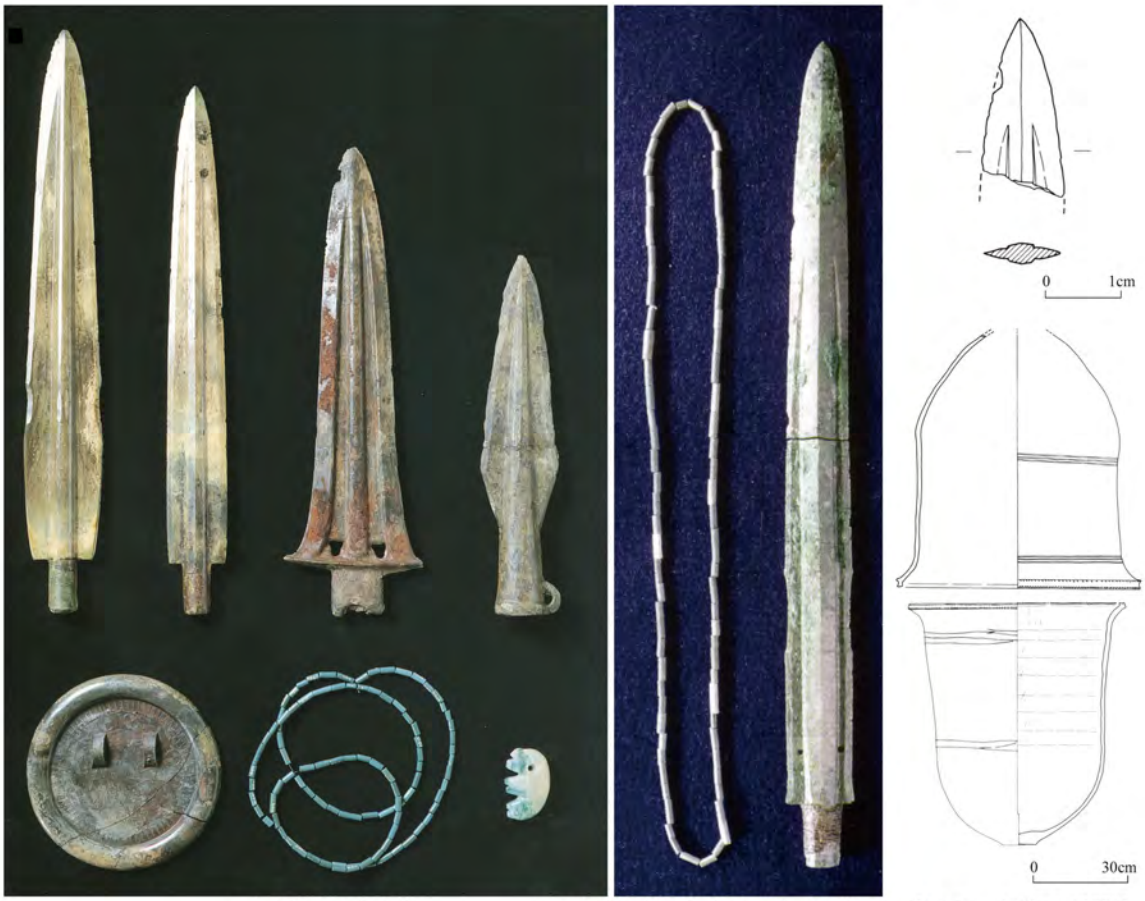
山崎頼人2015「三沢北中尾遺跡出土銅斧片の意義: 日韓青銅斧の研究」『古文化談叢』74

吉田広2010「日本列島の初期青銅器文化」『季刊考古学』135

遼寧省昭島達盟文物工作站・他1973「寧城県南山根的石椁墓」『考古学報』1973(2)

若江賢三1985「漢代の穀価」『東洋哲学研究所紀要』1

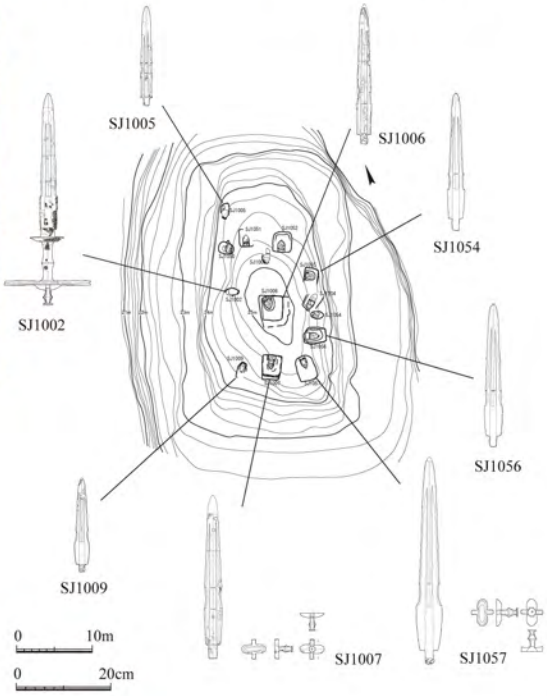
Jeong Y., Cheong C., Shin D., Lee K. , Jo H., Gautam M. K., Lee I., 2012. Regional variations in the lead isotopic composition of galena from southern Korea with implications for the discrimination of lead provenance. *Journal of Asian Earth Sciences*. 61



a. 吉武高木 3 号木棺　　b. 小倉城家老屋敷跡IV-1 号石棺墓　　c. 東山田一本杉 75 号甕棺

図 1　弥生時代中期初頭の青銅製武器（京都国立博物館 1993; 北九州市教育委員会 2012; 佐賀県教育委員会 1995）

a. 柚比本村 1137 号甕棺出土の赤漆玉細装鞘銅剣



b. 吉野ケ里遺跡北墳丘墓と銅剣

図 2　弥生時代中期前半の首長墓と青銅器（佐賀県教育委員会 2003; 2017）

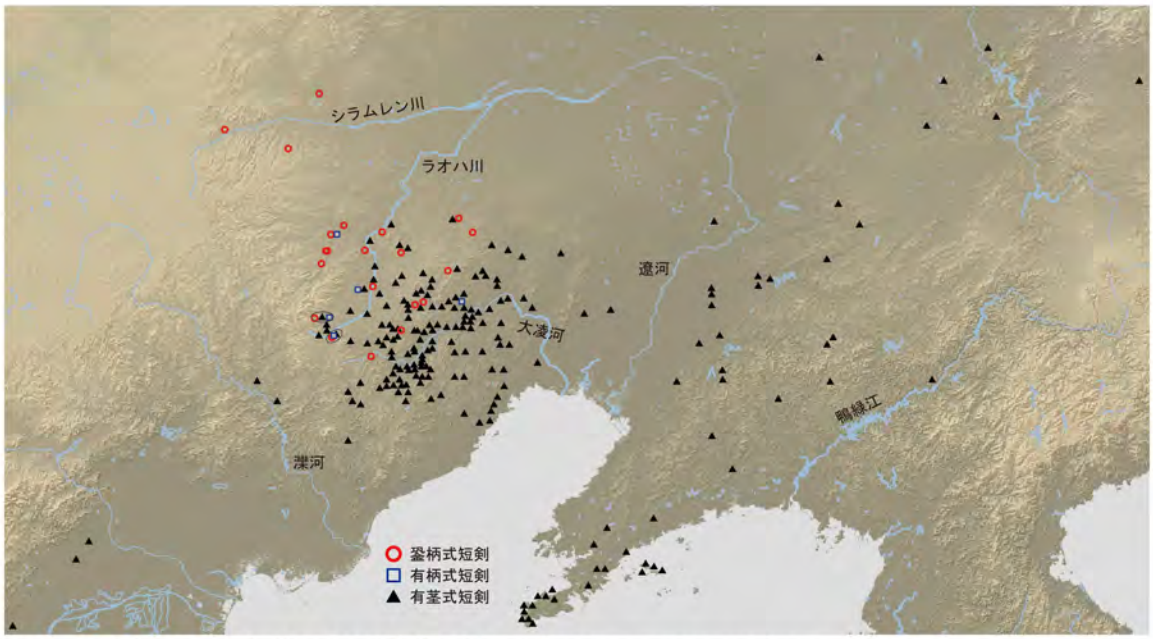


図 3　夏家店上層文化段階における青銅短剣の分布（靭楓毅 1982 を基に作成，朝鮮半島の事例は省略）

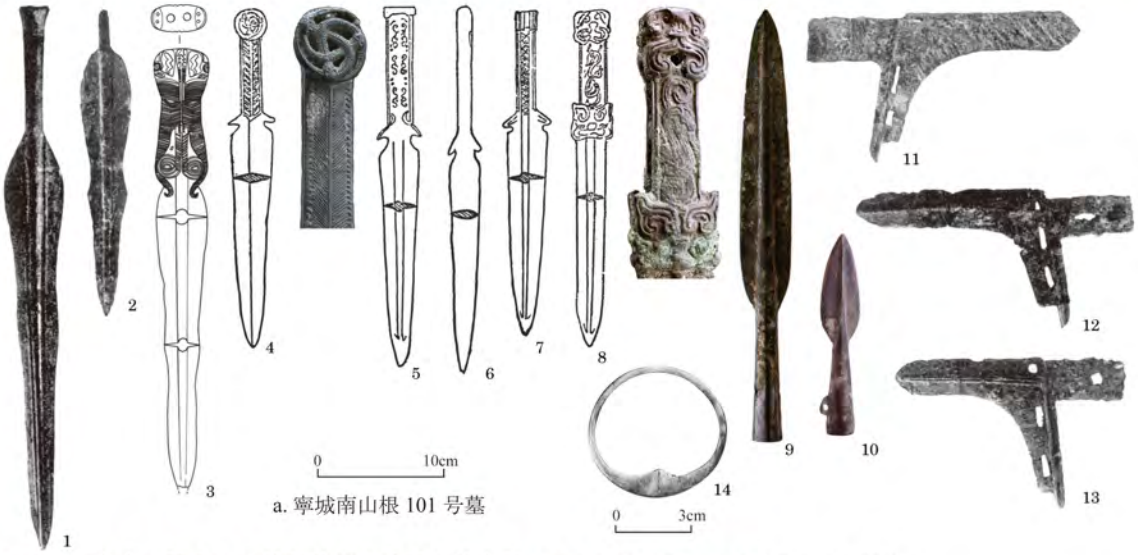


図 4　夏家店上層文化の首長墓出土武器と装身具（遼寧省昭島達盟文物工作站・他 1997）

図 5　瀋陽地区の粘土帯土器文化（中村 2012; 京畿道博物館 2010）

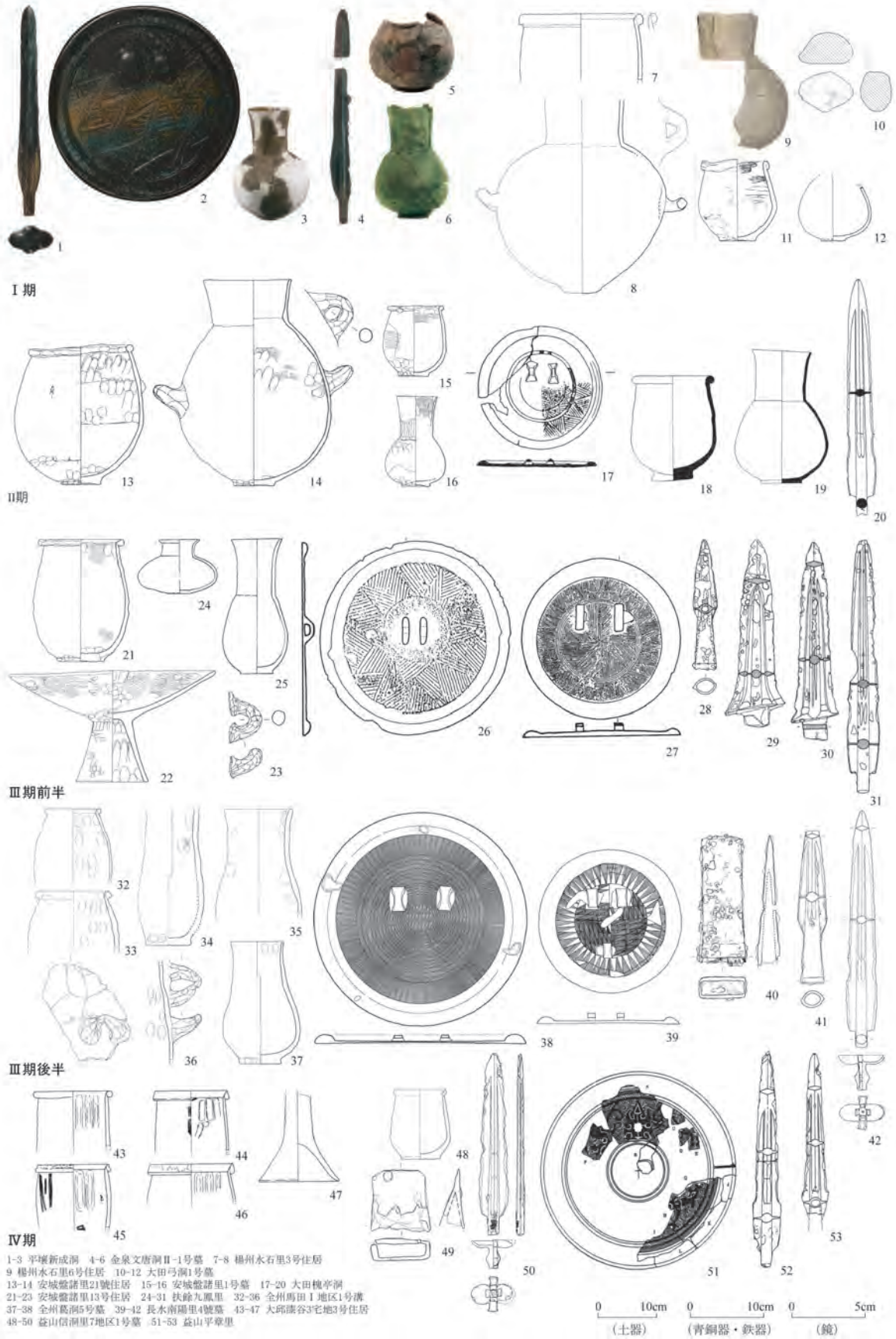


図 6　朝鮮半島の粘土帯土器文化の変遷（中村 2010; 2012）

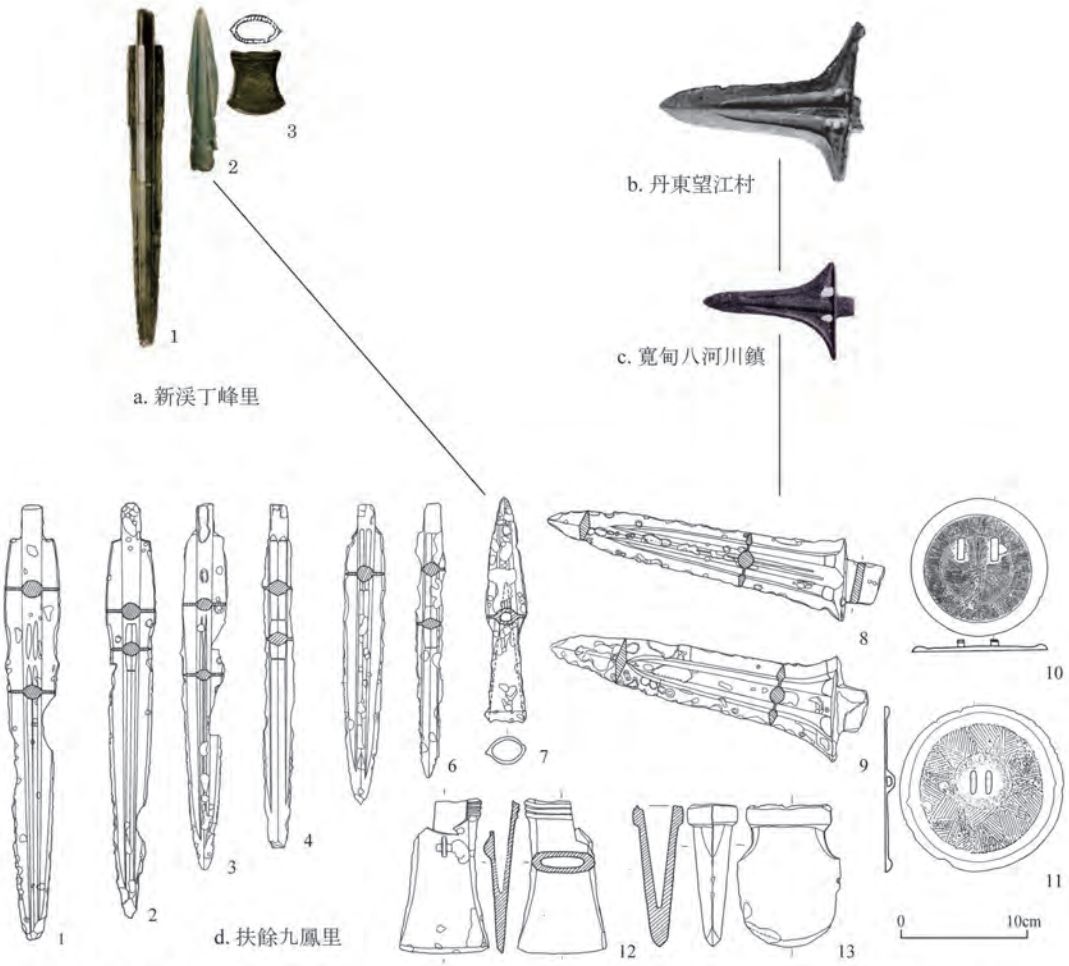


図 7　粘土帯土器文化首長墓の武器組成の形成（朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会 1989；小林・他 2012；石川 2017；小田・韓編 1991）

a. 楽浪土城採集半両銭鋳型（梅原・藤田編 1948）

b. 永平七年銘内行花文鏡
（Harverd Art Museums: object No. 1943.52.172）

図 8　青銅の価値と貨幣利用（https://hvrd.art/o/204118; 梅原・藤田編 1948）

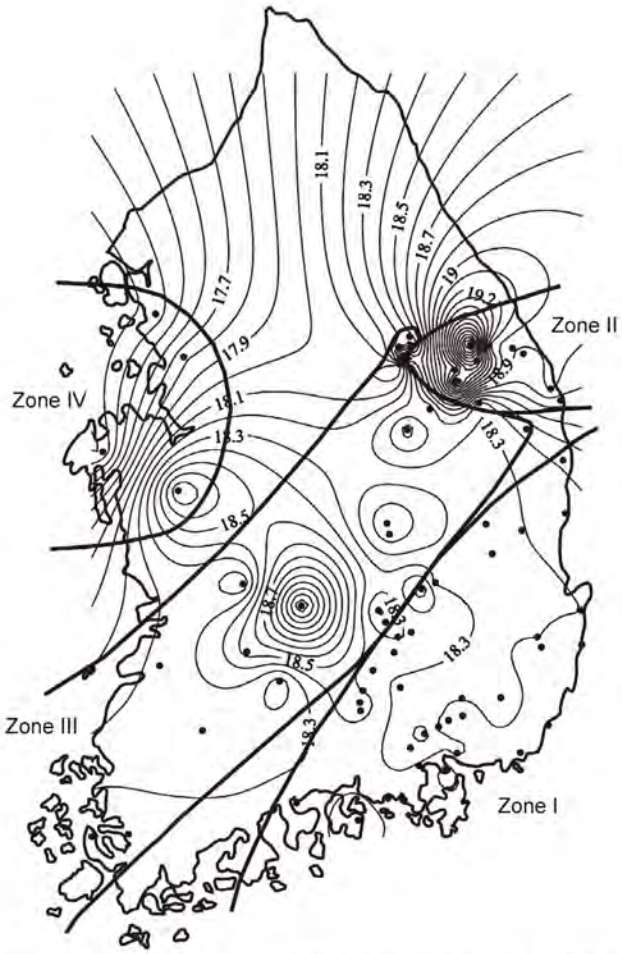


図 9　方鉛鉱の鉛同位体比による産地区分（Jeong et al 2012 原図 , 이가영 기타 2017 より作成）

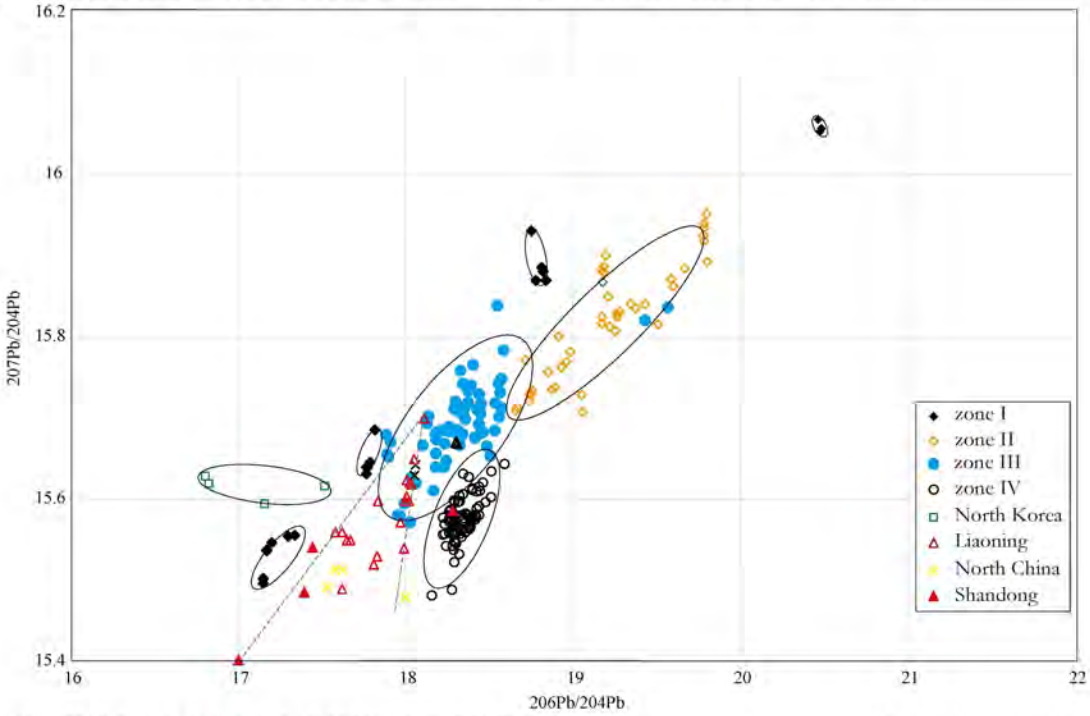


図10　朝鮮半島を中心とした方鉛鉱による産地区分（Jeong et al. 2012; 馬渕・平尾1987; 魏菊英1995より作成）

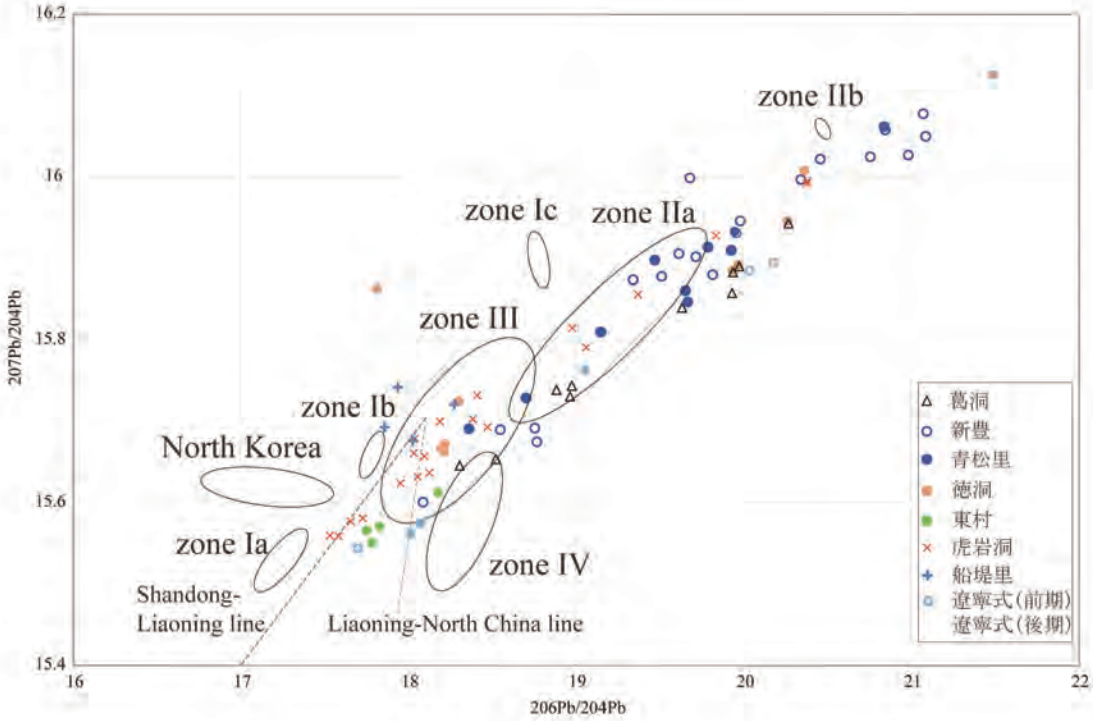


図11　青銅器時代及び粘土帯土器文化Ⅱ～Ⅳ期の青銅器の鉛同位体比（中村2021）

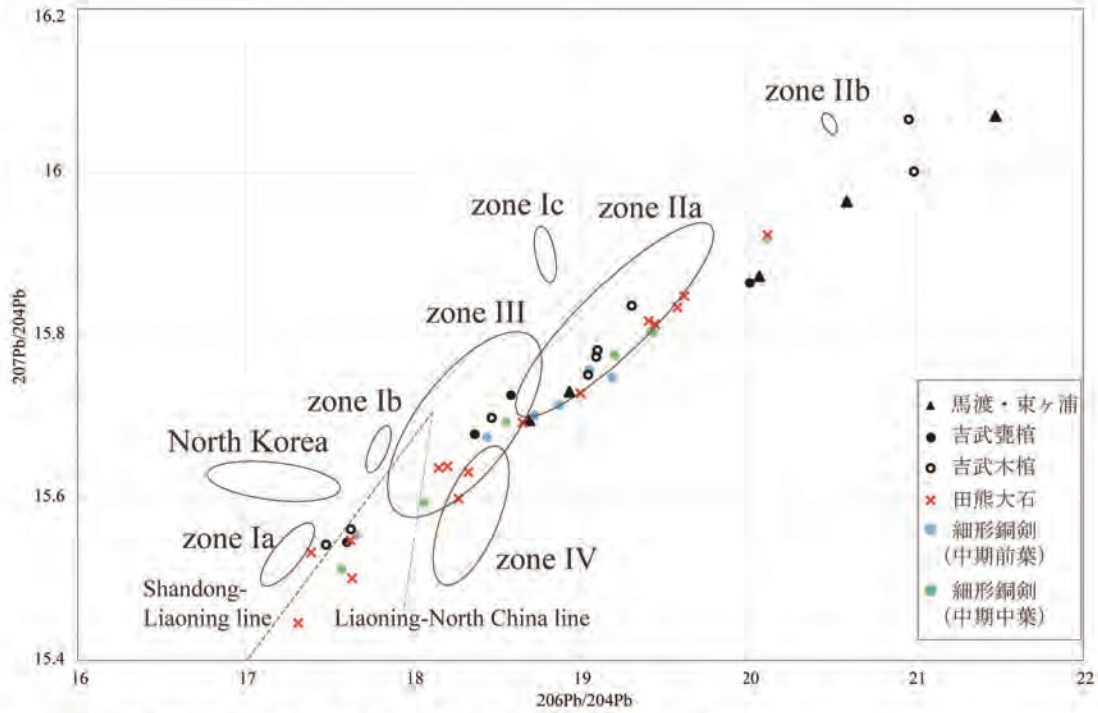


図12　弥生時代中期初頭～中葉の北部九州出土青銅器の鉛同位体比（中村2021）